

第142回（2021年度春季）大会若手研究者優秀賞選考報告

1. 選考の経緯

・4月27日 第1回委員会

選考対象者リストを作成し、選考日程を決定した。

・5月14日 第2回委員会

締切までに提出された7本のペーパーを対象に1次選考を行い、4本を2次選考の対象とすることに決定した。

・5月19日 第3回委員会

2次選考を行い、優秀賞対象者を決定した。

・5月22～23日 大会

2. 選考の結果

(1) 選考の結果（受賞作）

朴峻喜「労働運動と大学生の連帯—2013年韓国鉄道組合ストの事例から」

(2) 選考の理由

本報告は、韓国において2013年に発生した、韓国高速鉄道（KTX）民営化の是非を争点とする同国鉄道史上最長のストライキと、その際に展開された、労働組合と大学生グループとの連帯行動を対象とする研究の成果である。

周知のごとく、労働組合が、既存のメンバーや当該職種・企業・産業等の利害を超えた社会的・政治的 이슈にも取り組み、あるいは労働者組織以外の広範な市民運動・市民社会と連携・連帯を図り、そのことを通じて、労働組合運動の本来的領域における活性化をも実現ないし企図する新しい動向である「社会運動ユニオニズム」が、労働運動研究の分野において注目されるようになって久しい。しかし、本報告のように、労働側においては鉄道、カウンターパートの側においては学生という、労働・社会運動領域にあっては「伝統的」と言うべきセクターにおいても、そうした社会運動ユニオニズム的な動向が展開されていることに着目した研究は希少であり、かつ、研究史上重要な意義をもつ。

そして本報告は、当該争議に際しての労働組合の戦略と、学生によるスト労働者支持の要因をめぐる分析から剔抉しうる、労働組合と市民社会の連帯を可能とした理由は何か、という問題を設定した上で、労組は、日本の国鉄労働運動の敗北にも学びつつ、鉄道の「公共性」を前面に打ち出したキャンペーンを戦略として採用したこと、学生は、新自由主義政策下での過酷な競争にさらされ育ったことによるストレスと不安定性への認識から、こうした労組によるアピールに共感する条件をもっていたことが、その理由であるという結論を導き出している。

このように、本報告は、高い今日的意義をもち、かつユニークなテーマ設定の下、明確な問題設定と結論を提示するものであると評価できる。ただし、本報告は、学術論文としての水準如何、という視点からみたとき、概念の使用や用語の選択、方法の精緻さ、といった点

ではいくつかの課題を残している。候補となった他の報告のなかには、こうした視点で見れば、より完成度が高いと見なしうるものも存在したことは付言しておかなければならない。しかしながら朴氏の報告は、かかる粗削りな面を示しつつも、先鋭な問題意識に基づく野心的でユニークな研究であり、読者を引きつけ、将来性を感じさせる点では傑出しているという評価で選考委員全員の見解は一致をみた。こうしたことから、朴峻喜氏の報告が若手研究者優秀賞にふさわしいものと判断し、推挙するものである。

選考委員：岩田正美、兵頭淳史、松本伊智朗、森周子、鷺谷徹